

ノースカロライナの農業 ～企業的農業と家族経営農業～

広島県立安芸府中高等学校 和田 文雄

1. はじめに

この教材は、最近におけるアメリカ合衆国農業の変貌の一端を紹介するものである。

合衆国の農業について、例えば高等学校の地理の教科書によれば、それは世界で最も機械化された大規模経営により労働生産性が高く、効率の高い農業経営が展開している、とある。しかし、それがどのような方法で、いかになされているのかは具体的な説明はほとんどなされていない。これはそれを理解するためのひとつの教材である。

また、同様に合衆国の農業は、機械化の著しい進展と農業生産力が向上により大規模農業が発達する一方で、中小規模の農業経営の没落している、とあるが、このことについても同様に具体的な説明がなされていない。ここに提示する教材はそのことについての理解の手がかりとなりうるものである。

ここには、合衆国の2つの大規模な企業的経営農場と2つの中規模家族経営農場をとりあげている。2つの大規模経営農場とひとつの中規模家族経営農場はノースカロライナ州東部の農場であり、もうひとつの中規模家族農場はミネソタ州南部の農場である。

ここに示す教材はこれらの農場を訪れ、面接調査を実施して作成したものである。

教材理解の前提として、農業調査を実施した2つの州の農業の特色を以下に概観する。

ノースカロライナ州は南部地域に属しており、かつて奴隸制度に基づく大規模なプランテーション農業がおこなわれ、黒人奴隸による綿花やタバコの栽培が盛んであった。南北戦争後は、黒人労働者や分益小作農によるプランテーション農業が残った。その後は古くからの綿花地域は縮小している。



現在、ノースカロライナ州はタバコの生産が全米一で、州のほぼ全域で栽培されている。そのほかの作物は多様で大豆、トウモロコシおよび穀物などが栽培されており、また肉牛などの家畜を飼養する混合農業もおこなわれている。

ミネソタ州は合衆国北部、スペリオル湖の西に位置し、主として北欧およびドイツ系の移住者により開拓された地域であり、家族経営による農業がさかんであり、合衆国の農業地域としては基本的には商業的酪農地域に区分されている。

2. 企業的農場 — タッカー農場とダベンポート農場 —

タッカー農場

この農場はグリンビルのあるピット郡の西に隣接するグリーン郡のファームビルにある。農場の入り口の広い芝生に「株式会社・タッカー農場」との表示がある。

訪れた我々に説明し、案内してくれたのは、農場の経営担当部門の責任者であるビル・ターネッジ氏である。彼は28才で、イーストカロライナ大学（E C U）のビジネスコースを卒業しており、2年前よりこの農場で働いている。

この農場の経営者はチャップ・タッカー（40才）氏で、彼は父より譲り受けたこの農場を広げ、現在、この農場の面積は2000エーカー（約800ヘクタール）で、そのうち600エーカーが借地である。

経営者のタッカー氏は不在で会えなかったが、彼の家の一階の事務室で冷たいコーラをごちそうになりながら、話を聞いた。



ビル・ターネッジ氏

この農場で栽培している作物の主なものは、とうもろこし、大豆、穀物およびノースカロライナ州の代表的な作物であるたばこなどである。

栽培面積が最大のものは大豆の800 エーカーである。大豆はコストは少なくてすむが、そこそこの収入がえられ、すべて換金作物として栽培している。次いで栽培面積の広いのが、とうもろこしの560 エーカーである。

これは農場の収入全体に占める割合は低いものの、輪作作物として組み入れる価値が高いために栽培している。ここでつくられているとうもろこしはもっぱら飼料用であり、すべて換金作物として栽培している。この作物は天候の影響を受けやすく危険度の高い作物である。今年は旱魃による被害で40~50%の大幅な減収がみこまれている。

たばこは300 エーカーほど栽培しているが、収入全体の65~70%を占め、この農場にとって最も重要な作物である。たばこの栽培面積は毎年一月に州政府より各農場ごとの割当面積が厳しく決められており、かってに増やすことはできない。たばこは高い収入をもたらすが、生産コストも高い作物である。タバコは年三回作るが、栽培作業は大変なハードワークであり、しかもきめ細かい管理を必要とする。

比較的栽培面積の広いのが大麦、小麦およびオート麦などの穀物 (small grains) で、この農場では750 エーカー栽培している。

そのほかの作物としてのピーナツ (100 エーカー) は、換金作物としてすぐれていおり、これも州政府からの作付け割り当てに従って栽培されている。

キュウリ (40エーカー) 栽培は、おもにタバコの種付けと収穫の間の労働者の作業としての役割りがある。収穫作業に対しては、その売上げ代金の60%が支払われることとなっている。

このほか芝生 (30エーカー) を育てているが、これは単位面積 (エーカー)あたりの生産額が1.5 万ドルと、非常に収益性の高い作物ではある。しかし、市場が狭く、種付けから出荷できるまで3年を要し、多く生産はできない。

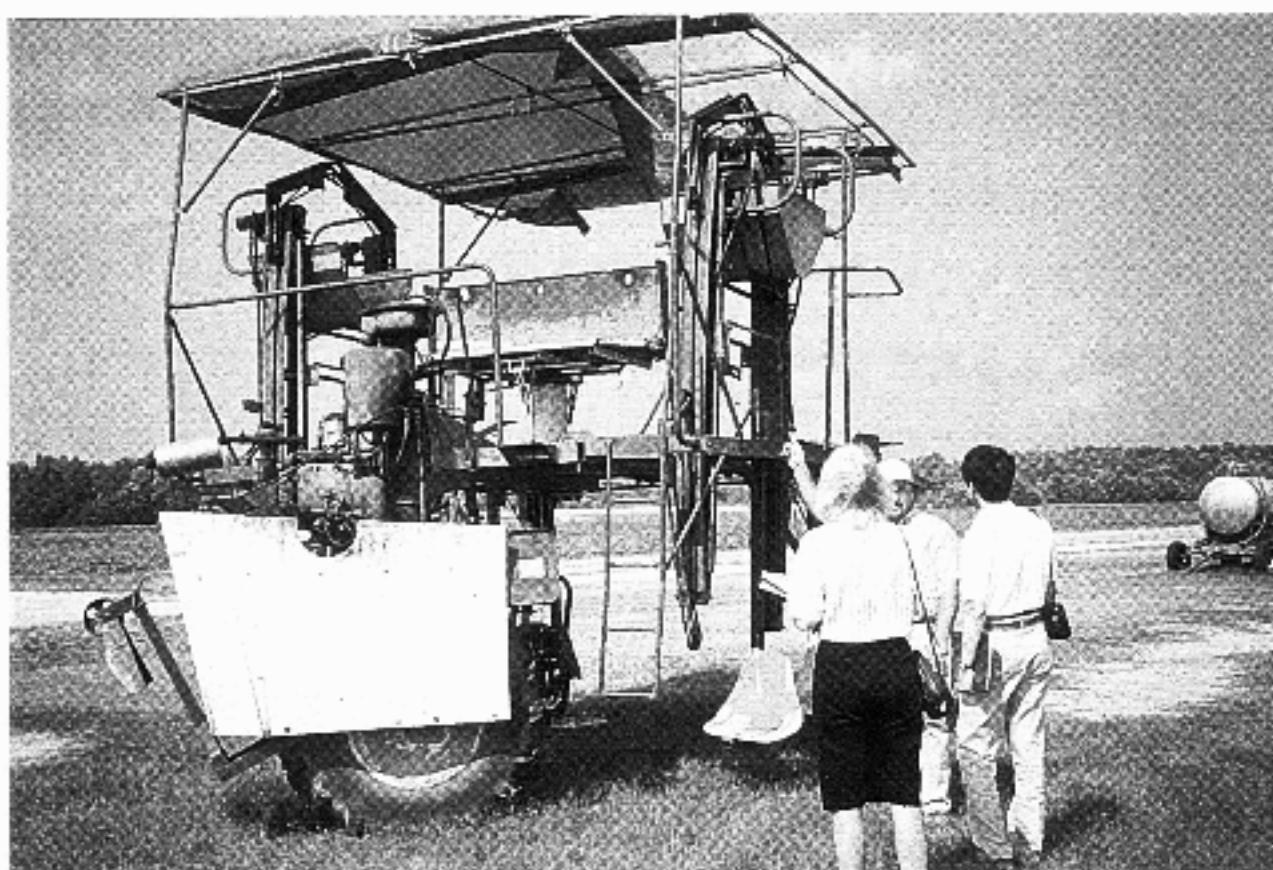
この農場でおこなわれている輪作は、最初の年にタバコを栽培すると、同じ耕地に11月から翌年の6月にかけて小麦などの穀物を作り、6月から12月にかけては大豆、そしてその後はとうもろこし、という順に栽培する。

この農場には農業用機械としてまず、大小さまざまの11台のトラクターがある（一台の値段が1.5 ~ 6.5 万ドル）。付属機械としてはハロー、種植機およびカッターなどがある。コンバイン（穀物、大豆、とうもろこしの収穫用）は3台で、一台の価格が12.5万ドル

と高価であり、ピーナツコンバインは2台である。

農産物運搬用の2トントラックは10台で、0.5トントラックは15台も所有している。

これらの機械は整備工場の裏に整然と並べられている。



タバコ収穫機

この農場には40のタバコ乾燥庫がある。一回のタバコの乾燥には7日間かかり、その間庫内を90~100 ° Fに保ち、現在は燃料に重油を用いている。そのほか穀物倉庫などもある。大型の農薬噴霧機械は3つあり、この地域には珍しい灌漑用施設であるセンタービポットをひとつ設置している。これは半径600 フィートで30エーカーを一度に灌漑できる。

この農場では23人の社員が雇用されている。その内訳はジェネラルマネージャーとアシスタントマネージャーがそれぞれ一名、農場監督は4名（2人はタバコ専門、2人は穀物その他）である。秘書は2名で、そのほかに設備オペレーターおよび整備士などが15名である。

そのほかこの農場では臨時雇いとして、たばこの栽培時期に約60人の農場作業労働者を雇っている。彼らはメキシコ人で、たばこの種付けから摘み取りまでをおこなう。

労賃は一時間あたり4.5~5ドルである。この労働はかつてはほとんどが黒人であったが、政府の社会福祉政策の充実により、きついこの労働をしなくなり、数年前からメキシコ人がこれにとってかわったのである。

この農場の収入について金額は明示してもらえなかったが、経営を維持できるに十分な収入を得ているし、投資に関しては適切な利潤はあるとのことであった。社員の賃金につ

いても他の同様の労働とはつりあっている。「週一日は休みである。自分としては毎年11月に3週間ほど、まとまった休暇を取ることにしている」とターネッジ氏は話す。

ダベンポート農場

この企業的農場はグリンビルの西郊およそ10マイルの地点にある。

インタビューに応じたのはローレンス・ダベンポート氏（41才）で、彼は二人の弟と共にこの農場を経営している。奥さんは高校の先生である。子供は3人（長男27才、長女24才、次女18才）である。母（59才）は近くに住む。

祖先は英國（アイルランド系）であるが、そのルーツについてよくはわからない。

彼の曾祖父が南北戦争の直後に、17才の時、となりの郡よりここにやってきて、農業を始めたのが最初である。

現在、2000エーカーの農地を耕作しているが60%が所有地で、残りは借地である。

作物の作付け面積はタバコが140エーカー、トウモロコシ700エーカー、ビーナツ150エーカー、綿花300エーカー、大豆900エーカーおよび小麦150エーカーとなっている。面積の合計が2000エーカーを超えるのは一年二作があるからである。現在、休耕地はない。

この農家は穀物会社などと栽培の契約を結んでいいるいわゆる契約農家ではない。

今年はひどい旱魃で、とくにトウモロコシは大きな損害を受け、タバコの成育状態も良くない。



ビーナツ畠

この農場の農業機械はトラクターが8台、コンバインハーベスターが5台（穀物用1台、ピーナツ用2台、タバコ用2台）そしてトラックが7台である。

作物売却の取り引きのある業者はおよそ40あり、ダベンポート氏はシカゴの作物取り引き市場のブローカーと適宜連絡を取り、売りの指示をしている。

農業用品や種子を売ったりする小さな店も経営している。客は付近の農家である。

たばこの葉は市にだし、競売にかけるが、それが輸出されているかどうかは不明である。この農場では、常雇いは9人で、農作業に6人、店員として2人、そして事務員を一人おいている。

臨時雇いは12人で、すべてメキシコ人の季節労働者である。彼らは4月から10月までこの農園で働いている。それまではほとんどが黒人であったが、4年前よりメキシコ人を雇用するようになった。彼らは17～20才のいずれも男子で、賃金は自給で4.25ドルである。

ここにはタバコ乾燥庫が20あり、タバコの収穫時期には、ひとつの乾燥庫をいっぱいにすると45ドル（一時間あたり約9ドル）が支払われる。

たばこの収穫期は7月後半から9～10週間（毎週16の乾燥庫が一杯になる。）である。

彼らの住宅は農場の建設したものが農場内にあり、家賃は無料である。

この農場の純益は年間1.5～7万ドルで、それは当然のことながら、年により大きく異なる。農業は常に不安定で危険も多い。今年のトウモロコシは旱魃による被害が大きく、3年間は影響が残るであろう。

この農場の収入のうち40～50%がタバコによるものである。連邦政府によるタバコ作付けの割り当ては年は140エーカーであった。今年出荷している葉たばこの25%は去年収穫したものである。農業以外による純益収入は、奥さんによるもの以外ほとんどない。

人件費はひとり年1～1.2万ドルである。この農場には債務はいまのところない。

連邦政府の農業政策に関しては外国、例えば人件費の安いブラジルなどの農産物に対抗するためには助成金はもっと必要であると考える。農業の見通しについては決して良いと思っているわけではない。なぜなら、例えばピーナツ会社などが常に議会においてその値上げを抑えるためのロビー活動を積極的に展開しているからである。

この農場の後継者については、2人の弟とあわせて10人の子供がいるが、そのうち一人くらいは後を継いでくれるかもしれないと思っている。ローレンス・ダベンポート氏は大学を卒業して7年間肥料会社に勤めていたが、父の病気により農業を継いだ。彼は年中忙しく働いており、休みは余りとれない。毎夏、3週間ほどは土日を休む。農業関係の会合

などで旅行するのが休みであるとはいえる。

インタビューの後で、同じ農場内にある彼の家まで車で行く、家に着くまで約10分。彼の家は南部風の邸宅である。彼の趣味はボートで、7人乗りのボートが庭先の川辺に係留してあった。

3 家族農家 — パーンズ農場とブーツ農場（ミネソタ州南部）

パーンズ農場

パーンズ農場は、グリンビルの西方約55マイルにある。

農場主であるサーマン・パーンズ氏は79才で、今は奥さんと2人だけで生活している。

彼はアイルランド系である。父の代からこの地で農業を営んでおり、所有農地は250エーカーで、この地域では平均的規模である。

パーンズ氏の家は決して大きくはないが、ベッドルームは3つあり、夫婦で住むには十分なスペースである。リビングルームの大きなテレビが印象的で、快適なテラスルームで話を聞く。彼はなまりのある言葉でゆっくりと話し、耳がやや遠いようである。

彼が農業を始めたのは16才の時、父親から1エーカーのタバコ畑をまかされたのが最初である。父親の農業を受け継ぎ、契約農業（シェアクロッピング）により農業を営んできたが、1963年からそれをやめ、以後は農地のすべて他人に貸している。

現在、一年契約で、ある農家に農地をすべて貸している。たばこは生産額の25%を、それ以外はエーカーあたり45ドルをパーンズ氏が受け取る契約である。

今年、彼の農地の作物は、たばこ（22エーカー）、とうもろこし（50エーカー）、大豆（50エーカー）および小麦（25～30エーカー）で、綿花は作っていない。

自分の農地を借地に出してからはタバコ市場のオーナーの一人となり、年間6ヶ月家をあけるタバコのオークションのバイヤーの仕事をした。現在は引退しており、年金による収入もある。

この地域では小規模農家は農業のみではやってはゆけないし、兼業農家がほとんどである。近所には9つ農家からの農地を借りている人もいる。その人は若い農夫で、農業のみに従事しているが、奥さんは教師である。

自分の農地を貸す人は多いが、農地を売却し、手放す人はあまりいない。

今の趣味はなく自分のタバコ農場を見にいったりすることぐらいである。昔はゴルフをよくしていたし、魚釣りも趣味だったが、今は体調が良くないのでやらない。

お別れする前にバーンズ氏は自分の納屋に連れてゆき、馬につけるカラーのコレクションを見せてくれた。

ブーツ農場

ミネソタ州の酪農農家であるヘンリー・ブーツ氏（58才）の農場はミネアポリスの西約160 マイルにある。眼鏡の奥の目が優しい知的な感じのする人である。

我々が訪れた時、ちょうど小麦の刈り取りを行なっていた。脱穀をせず、刈り取った小麦をそのまま畑に寝かせていたのは穂が湿っており、乾燥させるためである。今年は冷夏の影響で、小麦のできもよくない。

彼はドイツ系で、父（85才）が20才の時、ここにやってきて農業を始めたのが最初である。農場の広さはおよそ500 エーカーで、この辺りでは平均的である。

この辺りは一年一作地域であり、作物は小麦（40エーカー）、とうもろこし（140 エーカー）、大豆（170 エーカー）およびアルファルファ（85エーカー）などで、例年20エーカーの休耕地があるが、今年は耕作するようにとの州政府の指示に従い、アルファルファを作った。

彼は50頭の乳牛を飼っており、収入の約70%が生乳によるものである。生乳の加工はやっておらず、もっぱら生乳のみを出荷する。

搾乳は朝と夕の一日2回（AM6-PM5.30）で、搾乳小屋には自動的に乳をしぶる装置があり、しぶった乳は自動的にタンクにためられるようになっている。ミルクは常に34 °Fで冷蔵されている。一日おきに全米最大の酪農協同組合であるアソシエイト・ミルクプロデューサーのトレーラーが集荷にやってくる。

彼にとってミルクによる収入は大きく、それだけに生産過剰による値崩れを心配する。

2年前がそうであった。

そのほかとしては肉牛を飼育し、野菜も作っているが、いずれも自家消費用である。

冬の飼料として麦わらの束を作っていたが、この農場ではひとつ70ポンドの束を年に1200から2000個ぐらいいくつくるとのこと。

サイロは穀物用のものと飼料用の2種類がある。高いサイロは飼料用の干し草を入れる。穀物用のものは市況をみながら出荷するためである。



ブーツ農場

この辺りでは農地を 1 エーカーあたり 75~100 ドルで貸している。売る場合は 1500~2000 ドル / acre が相場であるが、売ることはほとんどない。その理由は、売れば収入の継続が絶たれることになるし、相続税対策などから売らない方がよいからである。

今年は冷夏だったので、収穫が大分遅くなっている。9月末になると霜が降り始めるので、収穫が例年の例以下になる可能性もある。今年は洪水の被害もあり、この農場でも 20 ~ 30 エーカーが水をかぶった。この地域は連邦政府により特別災害地域に指定され、1 ドルの損害に対し、35セントの支援がなされることになっている。そのほか保険などを合わせると 1 ドルに対し 75 セントまでの保障がなされる。

政府の農業政策に対しては、牛乳の価格の自由化を希望している。牛乳の基本価格は廃止すべきであると思っている。また外国の乳製品に対抗するためには政府の補助金がもっと必要である。

奥さんは老人関係の福祉施設で働いている。結婚して近所に住む種子会社に勤める息子も休日には農作業を手伝う。

夫婦の家はこじんまりとした白い木造の二階建てで、二階と地下にそれぞれ 2 つのベッドルームがある。奥さんの趣味は家のミニチュアを作ること。テーブルの上には作りかけのものがあった。

アメリカの大規模経営農業の現状

～日本の農業との比較を通して～

山口県徳地町立堀中学校 山本 英明

I. はじめに

日本の中学校では、平成5年度より、社会科において世界地理を学習する場合、学習指導要領の改訂により、世界の諸地域が選択制になった。アメリカ合衆国・ロシア連邦・E.C.・西アフリカ・東南アジア・中国などのさまざまな地域の中から、学校や地域の実状にあわせていくつか選択して学習することになったのである。しかし、どこの学校現場でも必ずと言っていいほど「アメリカ」は学習される。アメリカを学習する場合、その中心は「広い国土と大規模農業=世界の食料庫」であろう。中学校的授業では、アメリカの農業は2時間かけて学習する。この時、中学生にぜひ把握させたいポイントは、①大型機械による大規模農業 ②自然環境に適した農業 の2点である。

今回、我々Eチームは、3日間に渡ってノースカロライナ州における企業経営的な大規模農家と個人による小規模農家の2つの異なったタイプの農家を現地調査した。中学校的社会科は、1つのことを探る高校社会とは違い、「広く浅く」が原則である。この資料は、日本の農業（農家）の現状と比較しつつ、アメリカの大規模農業とはいかなるものかというその全体像を大まかに中学生に把握させることをねらいとしている。また、アメリカの中学生に対しては、日本の農業の現状とたばこに関する日本人の認識を紹介することにより、相互理解の手助けとなれば幸いである。

さらには、「たばこ」について日本の中学校ではあまり学習しないが、あえてここでは詳しく取り上げ、その現状と将来性をさまざまなエピソードを交えて紹介したい。この資料により、アメリカの農業を学習する際の新しい切込み口として、「たばこ産業」を取り上げる試みがなされたら、また今までとは違った学習効果が期待できるのではないか。

II. アメリカ合衆国の大規模農業 ~ 現地調査より

A. DAVENPORT FAMILY FARM IN GREENVILLE

アメリカの企業経営的農家の現地取材を希望した我々は、ノースカロライナ州のグリー

ンビル市のデイボンポート氏の（写真①）経営する農場（オフィス、写真②）を訪問した。デイボンポート氏は41才で、二人の兄弟と共同で農場を経営している。奥さんは高校の先生、こどもは3人である。我々は、店の奥にあるオフィスで取材を行った。まず、土地の広さはおよそ2000エーカーであるという。1エーカーは約0.4ヘクタールであり、日本の農家の平均耕地が1ヘクタールであることを考えると、いかに広大なものかがわかる。しかし、2000エーカーのうち、40%は借地だという。作付けの割合は、タバコが140エーカー、トウモロコシが700エーカー、ピーナツが150エーカー、綿花が300エーカー、大豆900エーカー、小麦が150エーカーである。合計が2000エーカー超えているのは、1年に2回作物をつくる土地があるからだ。農業機械は、トラクター8台、コンバインハーベスター5台、トラック7台といへん多く、作物売却の取引のある業者は40を数える。日本の平均的農家だと、トラクター1台、軽トラック1台、コンバイン1台というところだろうか。しかも、その大きさが違う。また、オフィスにはコンピューターが設置しており、穀物の市場状況などがリアルタイムでわかり、売買の判断の重要な決め手となっている。この農場では、9人の常時雇いと12人の臨時雇いが働いており、日本の家族経営的農家とは異なる。12人の臨時雇いは、すべてメキシコ人で、4月から10月まで働いている。この農場の純益は、1.5万ドルから7万ドルであり、年によって大きく差がある。それだけ農業はリスクが大きいのである。

この調査で意外に感じたことがある。それは、たばこの作付け面積を、政府が州（農家）ごとに割り当てている点である。日本の場合、政府が農業政策を重視しているのに対し、アメリカは生産に関して干渉しないのかと思っていたから意外であった。今年のたばこの作付面積140エーカーが政府から決められた面積である。そのねらいはよく解らないが、値段の低下を防ぐためだろう。たばこの栽培は良い収入源であり、収入のおよそ半分を占めている。また、政府に対しては、外国に対抗するためにもっと助成金を出してほしいと希望している。この農場の後継者については、自分たち3人の兄弟に合計10人の子どもがいるから、誰かが継いでくれるだろうと答えた。

B. 調査後の感想

今回の調査でまず感じたのは、このデイボンポート氏は、農民というイメージではなく、企業人という印象を受けたことだ。現に彼は大学を卒業したインテリであり、農業に対する取り組みはビジネスマンのようである。

また、農業というと日本では暗いイメージで受け取られやすいが、アメリカの農業に携わる人は実に屈託がなく、明るいように感じた。

しかし、全労働者中に占める農業人口の割合が世界1少ない国はアメリカなのだ。

☆発問・指導例

- ①アメリカの農業の特色を、簡単にまとめさせる。
- ②農家がコンピュータを持っている理由を考えさせる。（利用法について）
- ③アメリカでは、農業がビジネスとして捉えられていることを理解させる。
- ④日米の耕地面積をトラペンシート等に図示し、比較してみる。

①我々に、自分の農場で説明する
デイボンポート氏



②デイボンポート氏の店
この建物の奥にオフィスがある。



III. 日本の農業 ~ 稲作から見た現状と課題

A. 減反政策

島国である日本は平野が少なく、農家の人々は狭い耕地からいかにして多くの収穫をあげるかということに努力を費やしてきた。大量の肥料をつぎ込み、品種改良を行い、狭い耕地に手間暇をかけることが日本の農業、特に稲作の特色であり、アメリカの農業と最も大きく異なる点である。このような努力により、日本の米の収穫量は飛躍的に増加した。

しかし、戦後になり日本人の食生活が欧米化し始めたため、米の消費量が減少し、余り始めた。その対策として政府は、水田を減らすいわゆる減反政策を行い、米の生産調整を始めたのである。水田を畑作に転換した場合は補助金を出すなど、政府は農業政策に積極的にかかわったが、このような関係も日本の農業の特色のひとつであろう。

B. 食料管理制度

秋に収穫された米は、政府がいったん農家から農協等を通して買い上げ、業者を通して消費者へ売られて行く。米の買い上げ値段（生産者米価）は、毎年米価審議会で検討され最終的に政府が決定する。この価格決定の際、様々な団体の思惑がからみ、政治的な動きがあり、なかなか興味深い。農業政策は、政府の仕事の中で最も大切な仕事のひとつなのだ。このように、政府が米の流通に携わる制度を食料管理制度という。この管理制度の網の目をくぐり抜けて市場へ流れる米を「ヤミ米」と言い、問題となっている。しかし、このような制度自体がすでに時代に合わないものであり、米も政府の手を離れて自由競争すべきだという意見もたいへん多い。

C. 現状と課題

次に、数字で現状を捉えてみたい。まず、農家の戸数は1970年には5,402,000戸あったが、1990年には2,971,000戸まで減少し、20年の中に、半分になっている。

また、専業農家と兼業農家に分類すると、その割合の比率が1942年にはおよそ専業

40%：兼業60%であったのに対し、1989年には専業16%：兼業84%になっている。また農家戸数の減少だけでなく、農業従事者の高齢化も問題になっている。農家の跡継ぎがたいへん少ないので、日本の食料自給率が先進国の中で最低なのも、無理はないのである。したがって、先祖伝来の土地の管理を農協に任せ、米を作ってもらうという農家も増えている。

アメリカが米の自由化を要求している現在、農家は様々な試みをしつつある。例えば、つくり手のいない水田を借りて、アメリカなみに会社を設立し、農業をビジネスとして経営する動き、品種改良を繰り返し、米のブランド化をはかる、または稻作から野菜や花・果樹中心の農業への転換などである。しかし、いずれも個人の力には自ずと限界があり、これから日本の農業がより発展するためには、やはり政府（国）がなんらかの形で積極的に関わる必要があるのかもしれない。

☆発問・指導例

- ①日本の農業人口が減少している理由を考えさせる。
- ②日本政府が、農業特に米の生産に深く関与している理由を考えさせる。
- ③1993年の米の大不作による外国米の緊急輸入に触れ、米の貿易自由化の是非について考えさせる。



写真③日本の小規模農家の田植えの様子である。

この田植機は、一台がおよそ60万円する。

IV. たばこ産業について

A. 現地調査より

今回我々が訪れたノースカロライナ州は、タバコの生産で有名である。我々一行がノースカロライナ州の空港に到着し、そこからグリーンビル市に向かう途中、ハイウェイを1時間ばかり走ると、道路の両端に広大なたばこ畑が開けていた。ここでは、多くの農家がたばこを栽培しており、収入の中に占める割合も高い。日本ではたばこが専売制であるのに対し、アメリカのたばこ産業は基本的には政府は価格の決定に関与しない。日本では考えられないことだが、スーパーではたばこが値引き販売されている。

「アメリカの農業」の教材としては、グレートプレーンズやプレーリーがよく取り上げられ、たばこ産業については名前だけでほとんど学習しない。しかし、今回の現地調査で、私が特に关心を持ったことのひとつに「Tobacco warehouse」がある。Tobacco warehouseとは、乾燥させたたばこの葉を集め、オークションを行う建物のことである。ここでは2ヶ所のTobacco warehouseで見聞きしたことを紹介したい。

B. farmer's Warehouse (写真④)

8月3日の午後、最初のTobacco warehouseを訪問した。たいへん広い建物であり、かなり古く中は蒸し暑い。じっとしていても汗が止まらない。建物の中には、たばこの葉が275 kgずつの小山に分けられ、それを約20人の黒人の作業員たちがラップしていた。このオーナーの一人であるデビッド・イーストウッド氏に話を聞いた。今日のオークションはすでに終わっており、それぞれのたばこの葉の包には等級・値段・会社名を記したタグがつけられていた。天井には「DO NOT LITTER!」の垂れ幕が下がっていた。

C. New Greenvill Warehouse (写真⑤)

2つ目のTobacco warehouseでは、ちょうどオークションが始まるところであった。この

オークションは、たばこの包の間を、およそ15人のディーラーが歩きながらオークションが行われてゆく。値段を言う人はたいへん早口であり、我々には何を言っているのかよくわからない。1分間におよそ500個の単語をしゃべるくらいのスピードだという。

次々と値段が決められていく様子はたいへん興味深い。良質のたばこの葉とは、さわって厚みがあるものだという。

D. 季節労働者と社会構造

2つ目のTobacco warehouseでは、出稼ぎのメキシコ人が数名働いていた。英語をほとんど知らない彼らは、黙々と働いている。この収穫の時季にやってくる彼らには、市民権もなく、賃金も安い。2つのTobacco warehouseで暑い中きびしい仕事をしているのはいずれも白人ではなく、黒人とメキシコ人であった。（写真⑥）

このノースカロライナ州は、南北戦争でいう南部にあたるところで、昔から綿花が栽培され、黒人はきびしい仕事に従事してきた。

グリーンビルに来て特に感じたことであるが、肉体労働（Tobacco warehouseのラップ作業、ホテルの清掃、建設現場など）に従事しているのはほとんどが黒人であり、白人は皆無に近い。彼ら白人と黒人は、住居、職業などにおいて、「住み分け」をしているらしく、それは差別ではなく、アメリカでは普通の感覚らしい。

E. TOBACCO MUSEUM

8月4日の午前中、我々Eチームはグリーンビル市のとなりにあるウィルソン市に出かけた。このウィルソン市は、ノースカロライナ州1のたばこの生産地である。ここの人たちはたばこ産業に誇りを持っており、このことは、我々の訪問したThuman Barns氏の自動車に、「P r i d e i n T O B A C C O」というプレートがあったことからも伺われる（写真⑦）。今回我々の訪れたこの「タバコミュージアム」も、国・州によって建てられたのではなく、こここの地域の人々が自分たちで資金を出し合って建てられたものである。ここでは、たばこの栽培の様子をスライドで見せていただいた。

F. たばこ産業の将来性

私がアメリカのレストランでまず感じたことは、入店するとウェイトレスが「Smoking? Non smoking?」と聞くことである。普通、日本のレストランではこうはいかない。アメリカでは、公共の施設では禁煙が常識である。移動するバスの中でも、「No smoking」と明記してある。また、タバコのケースには「SURGEON GENERAL'S WARNING: Cigarette Smoke Contains Carbon monoxide.」と表示してある。日本でも、「健康のために吸いすぎに注意しましょう。」とタバコの箱に印刷してある。しかし、これらの表示は、あくまでたばこを吸う人のためであり、吸わない人のためではない。日本では、禁煙権という考えが定着したのはごく最近であり、これに関して、8月18日付の朝日新聞に興味深い投書が載っていたので、最後に資料として添付しておく。

たばこの喫煙率は、アメリカ国内で減少しつつある。我々の訪れたノースカロライナ州でも、外国向けのタバコの葉の輸出に力を入れつつあるという。禁煙運動が盛んになりつつある今日、これからたばこ産業の未来はどうであろうか。我々のチームは、グリーンビル市の公立学校の社会科教師と懇談する機会があり、その中の一人にすばり聞いてみた。「たばこ産業の未来は明るいと思いますか。暗いと思いますか。」彼女はしばらく沈黙したあと、「たいへん暗い」と答えた。そして「たばこの生産は減少し、それに代わって昔のように、綿花の生産が復活するでしょう。」と答えた。

☆発問・指導例

- ①メキシコ人の働いている理由を考えさせる。
- ②写真⑦を提示し、意味を考えさせる。（たばこへの誇りに気づかせる。）
- ③アメリカ国内で禁煙運動が盛んになると、生産されたたばこはどうなるだろう。
(社会科教師の返答を紹介する。)

V. その他

これまで文中で紹介してきた写真は、別添資料としてすべてスライドにしてある。また、たばこの苗の植え付けから収穫までの過程、さらにはたばこの葉が加工されて商品になっていく様子も、タバコミュージアムで見せていただいたものをビデオに収めている。また、日本の稻作の過程も、スライドにしてある。これらのスライド、ビデオ等の資料も当方にあるので、ぜひ御活用いただきたい。

<別添資料>

* 平成5年8月18日付 朝日新聞の投書欄より

”Non smoking or smoking?” これは、昨年暮らしたアメリカで、レストランに入る時に最初に聞かれる言葉である。飛行機内の国際線は全席禁煙、毎日通った病院と研究施設の館内は全館禁煙、たばこのテレビコマーシャルもない生活から帰国してみると、まだまだ日本は喫煙大国であった。飛行機は禁煙席が満席だからと喫煙席にまわされる。新幹線は禁煙車両を求めて、長いホームを歩かねばならない。レストランで禁煙席をお願いすれば、けげんな顔をされる。

わが国でも、たばこ、特に副流煙の健康への害が叫ばれ、喫煙権も市民権を得、ホテルの禁煙フロアの出現や、山手線内の構内の終日禁煙、医療機関の喫煙場所の規制など非喫煙者への配慮は見られるようになってきてはいる。しかしながら、男性の喫煙率はまだ60%を上回り、この数字は米国、英国などの30%台に比べて倍である。

レストランでは食後の一服を楽しみたい方もいるであろうから、せめて子ども連れの利用が多いファミリーレストランなどは、禁煙席を設けてほしいと思う。また、新幹線の禁煙車両も、車両位置の見直しを望みたい。（30才 女性）

* ①導入の資料としてもおもしろい。

②この資料を読んで、感想を発表させる。



写真④Farmer's warehouse



写真⑤New greenvill warehouse



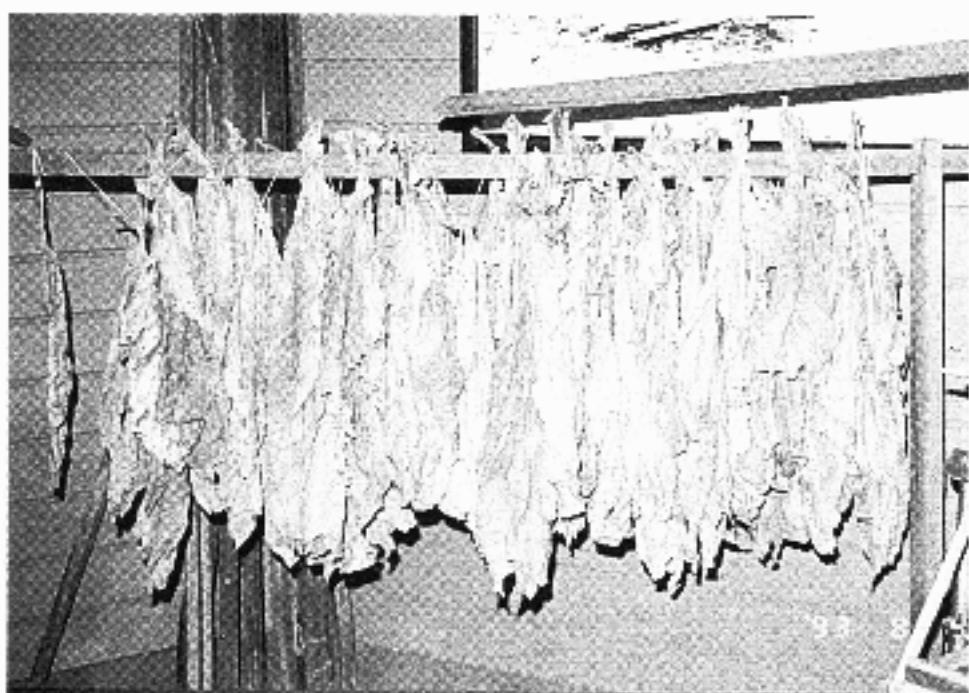
写真⑥季節労働者



写真⑦「Pride in Tobacco」の
プレート



写真⑧タバコオークションの様子
この写真是、タバコミュージアムに展示してあったものを
撮影した。



写真⑨乾燥したタバコの葉
これも、タバコミュージアム
に展示してあったもの。

アメリカ人の食生活と新しい農業

広島大学学校教育学部

深沢 清治

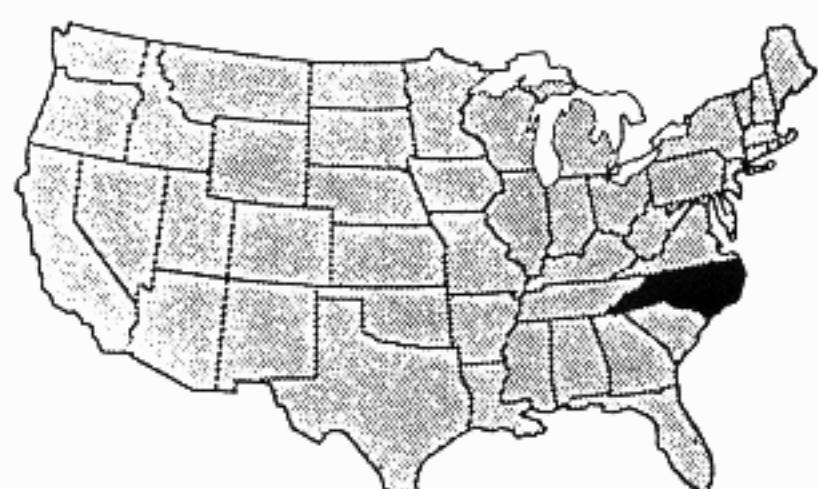
本教材の主題：

1. 農業国アメリカの中で有数の農業州としてのノースカロライナ
2. アメリカ・日本の食生活の変化
3. 食生活の変化に伴うアメリカの新しい農業の取り組み

はじめに

アメリカ合衆国は、今や世界一の農業先進国であり、世界の食料供給の多くを担っている。自動車、ハイテク製品、など技術大国としてのイメージに加えて、農業はアメリカの最大の輸出産業である。アメリカ合衆国の生活と文化を理解するためのカリキュラム・教材開発の題材として、農業は重要なテーマである。とりわけ、日本との関係において、米市場の開放などが政治問題になっている今日、その根底にあるアメリカの農業の現状、特異性などを理解することは、国際理解の一つのステップとなるであろう。

この教材作成プロジェクトのために、アメリカ合衆国のノースカロライナ州東部にあるグリーンヴィルを訪れ、現地調査を行った。南部に属するこの州は、国内最大のタバコ産業に加えて、歴史的にも有数の穀物生産地として知られている。本調査を通して、現地では地形や自然条件に適した農業だけでなく、消費者の食生活への嗜好や関心から、さまざまな新しい農業への取り組みが行われてきているのがわかった。本教材では aquaculture と呼ばれる一つの試みを取り上げる。



North Carolina

1 アメリカ人と食生活

近年、アメリカでは人々の健康に関する意識が高まってきており、健康のために何を食べるかが大きな関心を呼んでいる。実際、アメリカ人の健康についての関心と行動は相当なもので、街や公園はジョギングをする人たちで一杯である。肥満は心臓病の元凶として非難され、喫煙の習慣と同様に自らを管理する能力のなさとして昇進にも影響するとされている。事実、アメリカと日本の死因別死亡率を見ても、食生活に原因があると思われる病気について率が高くなっているのがわかる。（表1）

表1 アメリカ人と日本人の死因別死亡率

（単位：人口10万人当たり人）

		心疾患	脳血管疾患	ガン	糖尿病
アメリカ	1965年	33.8.1	10.3.5	15.3.2	17.1
	70	35.1.6	10.1.1	16.1.4	18.7
	76	33.2.3	8.7.9	17.5.8	16.1
日本	1965年	77.0	17.5.3	10.8.4	5.2
	70	86.7	17.5.8	11.6.8	7.4
	76	92.2	15.6.7	12.2.6	8.2
	81	107.5	13.4.2	14.1.9	7.2

資料：UN "Demographic Yearbook"
厚生省「人口動態統計」

生活が豊かになるにつれて、食生活に対する関心も、単に空腹を満たすことから、様々な嗜好を満たし、さらに健康のために何を食べたら良いかということへも向かうようである。日本においても、マスメディアは外食産業や輸入品など食生活の多様化について次々に特集し、書店には栄養の解説書から有機野菜、健康食品など健康に関する情報があふれ、食生活と健康についての関心が高まっている。

2 アメリカの食生活と農業の変化

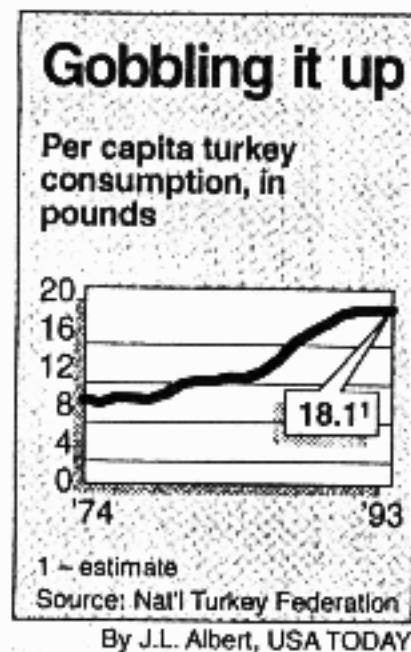
環境への関心、安全で健康に良い食べ物を求める消費者の要求、多様な味覚を求める声、などによりアメリカの農業は急速に様変わりしている。人々はより多くの新しい農産物を求めており、こうした変化は農業従事者にとっても新たな機会をもたらそうとしている。

国民の健康保持の立場から、1980年アメリカ農務省と厚生省が共同で「栄養とあなたの健康——アメリカ人のための食事指針」というパンフレットを発行し、アメリカ人の食生活改善の方法を説明している。一般にアメリカ人は肉食中心というイメージが持たれてい

るが、脂肪分の多い牛肉・豚肉に対して、近年、鳥肉や魚肉類の消費が着実に伸びてきている。スーパー・マーケットでは低脂肪牛乳に加えて、一般には感謝祭やクリスマスに食べることの多い七面鳥が一年中店頭に並んでいる。

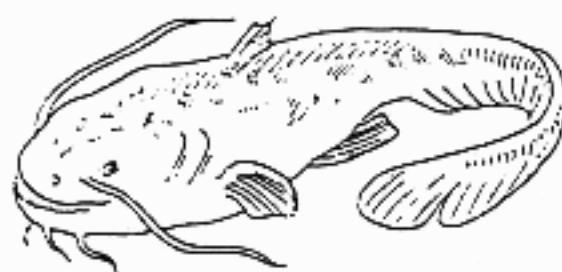
しかも、それの中には特に99%脂肪分をカットしたものも売られている。ある調査結果によれば、1993年にアメリカ人一人あたり18ポンドの七面鳥肉を食べたことになり、20年前と比べると10ポンドも多いという。低脂肪、低コレステロール、低価格、高栄養の七面鳥肉は、一年中を通して消費されている。これは、多くのアメリカ人が肥満と心臓病を恐れ、真剣に健康と食生活の問題に取り組もうとしていることの表れであろう。

ノースカロライナ州の農業もこのような動きに影響を受けている。事実、ノースカロライナ州は全米第一の七面鳥の産地であり、また、アイダホ州に統いて鯉の産地である。高脂肪の牛肉・豚肉に対して、脂肪の少ない鳥肉・魚肉に対しての需要は着実に伸びており、農業生産をも転換させようとしている。同州の温暖な気候、平坦な土地、豊富な地下水といった有利な土地の条件は、タバコや穀物生産だけでなく、養殖漁業にも適しており、州内できまざまな試みが行われてきた。



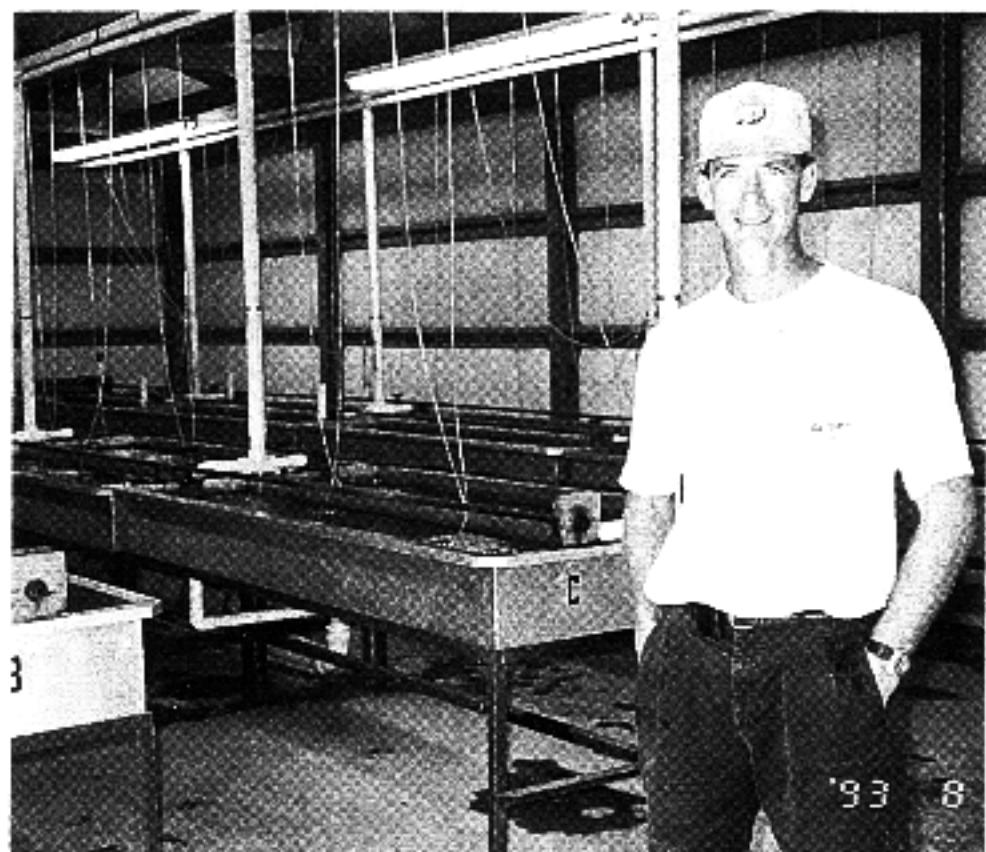
3 Aquaculture—新しい農業

水の中で植物や動物を育てることは 'aquaculture' と呼ばれ、ノースカロライナ州においても近年、躍進をしている産業の一つである。今回の現地調査では Carolina Classics Catfish Farm を訪れた。ノースカロライナ州は、アーカンソー、ミズーリ州に続くなまずの生産地である。なまずの養殖は、もともとはアーカンソー州で始まり、その後、ミシシッピ川下流域で盛んになり、ノースカロライナは現在、全米第3位の生産地である。日本では、なまずは地中で地震を起こすという迷信があるが、アメリカではマグロ、エビ、タラ、などと共に人気の高い



魚類である。かつては釣ったらすぐに水に投げ返した魚(trashfish)であり見向きもされなかつたが、今では低脂肪の健康食としてもてはやされている。

Acuaculture とは、単に魚を池に投げ入れておくことではない。農業としてのなまず養殖にも、企業的経営や最新の科学技術を導入した品質管理など、アメリカ農業の形態が見られる。今回、調査した養殖場では18の契約農家を持ち、会社が採卵、孵化、稚魚の養殖・出荷まで引き受け、契約農家によって成魚へと養育され、毎年生産を伸ばしている。調査に協力してくれた Tom Blevins によれば270 エーカーに広がる広大な土地に、26の養殖池があり、當時、わずか2人で水温、水質、餌やり水中の酸素量などの管理を行っていた。3 肉食中心から健康食まで幅広い主張を持つアメリカ人の健康に対する関心は、将来の農業の方向までも変えようとしている。



Tom Blevins,

カロライナ・クラシックスなまず農場

4 日本とアメリカにおいての食生活の推移

国際交流が盛んになるにつれて、食文化の国際交流も増えてきて。アメリカでは日本料理や日本の食品がブームを呼び、それらの消費も伸びている。大都市を中心に日本料理店も多くみられるようになった。この理由として、味や物珍しさの他に健康に良いということが大きな位置を占めている。好きな食べ物としててんぷら、すし、さしみ、てりやき、等が挙げられ、そのイメージとして「太りすぎを防ぐ」など健康面での評価が高いのが目立っている。日本独自の食品も随分、アメリカ人の食生活の中に入り込んでいる。中でも醤油の普及は目ざましい。海草なども、英語では sea weed (海の雑草)と言っていたものが、最近では sea vegetable (海の野菜)と名前が変わっている。また、かつてはグルメ食品とされた椎茸も shiitake mushroom と呼ばれ、全米のスーパーマーケットで売られていると同時に、将来、有望な農産物として、ノースカロライナのような気候には理想

的とされている。このような情報は生活改善情報センター(North Carolina Cooperative Extension Service)などによって多くの農業従事者に提供されており、新しいアメリカの農業の可能性につながっている。



ワシントン、D. C. にある日本料理レストラン

これに対して、日本では昭和30年代に始まる高度経済成長によって、食生活が急速な変化を遂げた。大きな特徴として、まず、米の消費が著しく低下している。これに対して、乳製品、肉類・油脂類の摂取量が著しく増加している。アメリカからのファーストフード店も日本各地で定着している。献立の多様化とともに、摂取量が過剰になったり欧米型の疾病に変化するなど、問題点も指摘されている。こうした変化は、農業の将来にも影響を与えており、たとえば米消費の減少は減反、転作など大きな影響を与えている。現在の健康食ブームや食生活の多様化の中で、今後のアメリカ、日本の農業はどのように変化していくのだろうか。